

大学博物館の特徴を生かした教育普及活動とその運営組織構築に向けて —学生とともにつくる—

A case study of distinctive educational activity in university museum collaborating with students and its governance

梅村 綾子 (UMEMURA Ayako)・宇治原 妃美子 (UJIHARA Kimiko)

名古屋大学博物館

Nagoya University Museum, Nagoya University, Furo-cho, Chikusa, Nagoya 464-8601, Japan

概要

昨今，“若者の〇〇離れ”が叫ばれているが、博物館も例外ではない。事実、名古屋大学にも大学博物館があるにも関わらず、本学の学生ですら「知らない」「興味ない」方が多数派である。いうまでもなく、だからそのアクションが今、大学博物館に求められているに他ならない。

我々大学博物館は、大学での高等教育や研究活動のほか、展示およびアウトリーチ活動により大学と地域社会とをつなぐ活動を遂行する。特に後者においては、社会への巣立ちを目前にした学生らに挑戦の機会や場を提供することができるはずと考え、我々が展開する地域社会貢献活動の一つに、“若者の博物館離れ”の解決の糸口となることを目的としたアウトリーチ活動を試験的に導入した。本稿では、その実施報告とともに、将来の展望として、大学博物館の特徴を生かした教育普及活動に言及し、その運営組織の構築について提案する。

1. 学生らの意見に耳を傾けるために

“若者の博物館離れ”を意識した新企画を試験的に導入

名古屋大学博物館では、2019年からの名古屋大学記念事業プロジェクトNU MIRAIのもと、「未来に活かす博物館」構想を掲げ、一つにキャンパスミュージアムを整備した。そのプレ企画として、2018年11月～2019年3月に名古屋市教育委員会との大学連携キャンパス講座「歩いて楽しむキャンパスミュージアム（全5回）」を開催した（図1）。本企画は、博物館の指揮のもとで、様々な専門を背景とする本学学生や教職員とともに運ぶアウトリーチ活動の場として位置づけ、本学東山キャンパスを様々な視点で紹介することとし実施した。

学生スタッフの募集方法

本講座は、東山キャンパスを座学およびキャンパスガイドツアーの二部構成により紹介する「キャンパスミュージアム講座」とし、全5回のテーマを下記のように設定した。

名古屋大学博物館 大学連携キャンパス講座 2018年度
知的探検！歩いて楽しむ講座
名古屋大学 キャンパスミュージアム

名古屋大学東山キャンパスで、健康と知的好奇心も刺激するキャンパス歩きに出かけましょう。名古屋大学博物館を基盤に、名古屋大学の研究成果をはじめ、建築物、アート、自然をテーマにしたコースをご紹介します。歩きやすい履きものにしてください。全講座約30分。キャンパス歩き約60分の内容です。

回数	タイトル	日時	講師
第1回	ノーベル賞巡り 一名大発ノーベル賞受賞者のストーリー	日時：11月14日 (木) 13:00～14:30	講師：藤村綾子 (名古屋大学博物館研究員)
第2回	芸術巡り 一名大の芸術品をたどる	日時：12月5日 (木) 13:00～14:30	講師：秋篠久美 (名古屋大学大学院情報科学研究科教授)
第3回	ギャラリー巡り 一名大に点在する展示室ガイドツアー	日時：1月16日 (木) 13:00～14:30	講師：藤村綾子 (名古屋大学博物館研究員)
第4回	建築巡り 一名大キャンパスと建築を探る	日時：2月20日 (木) 13:00～14:30	講師：堀川和久 (名古屋大学工学部工学研究科教授)
第5回	自然探索 一名大に残された貴重な緑の“島”	日時：3月13日 (木) 13:00～14:30	講師：野井直樹 (名古屋大学大学院生命科学研究科教授)

参加 無料 申込 不要 定員：80名
※詳細は申込書、連絡会場にお知らせください。
※当日先着順とし、定員に達した時点で受付終了します。
※申込会場は、名古屋大学東山キャンパスの「学生センター」です。
※申込先：052-789-5767

名古屋大学博物館 (受付、講義会場)
TEL: 052-789-5767 FAX: 052-789-5896 HP: www.nmu.nagoya-u.ac.jp
電子版印刷版「名古屋大学」第2巻目次付、名古屋大学「名古屋大学」/ 15頁目次

図1. 「歩いて楽しむキャンパスミュージアム」のチラシ。

- 第1回 2018年11月14日「ノーベル賞巡り－名大発ノーベル賞受賞者のストーリー」
講師：梅村綾子（名古屋大学博物館・研究員）
- 第2回 2018年12月5日「芸術巡り－名大の芸術品をたどる」
講師：秋庭史典（名古屋大学大学院情報学研究科・准教授）
- 第3回 2019年1月16日「ギャラリー巡り－名大に点在する展示室ガイドツアー」
講師：梅村綾子（名古屋大学博物館・研究員）
- 第4回 2019年2月20日「建築巡り－名大キャンパスと建築を探る」
講師：恒川和久（名古屋大学大学院工学研究科・准教授）
- 第5回 2019年3月13日「自然探索－名大に残された貴重な緑の“島”」
講師：肘井直樹（名古屋大学大学院生命農学研究科・教授）

学生スタッフの募集は、草の根的に、人的ネットワークの伝手を頼りに勧誘した。例えば、各講座の講師である教員が授業で紹介したり、運営スタッフとして活動する場合は授業1コマ分を出席したとするインセンティブを与えたりするなどの協力を得た。また、学生スタッフは単に言われたことを成し遂げるのではなく、自ら企画を作り上げていくことに責任を持って取り組んでもらうこととなる。そのため、労働の対価として、謝金が支払えるよう予算を確保した。

チームワークによる準備

各講座は、30分程度の講師による講義ののち、60分のキャンパス巡りで構成された。キャンパス巡りについては、各回2～5名の学生スタッフが役割分担およびチームワークにより企画を進められるよう指揮を取った(図2)。ルート担当は、80名以上の参加者全員がキャンパス巡りを楽しめるようグループ分けするとともに、歩くスピードや車いす・ベビーカーにも配慮した最適なルートを提案した。施設等の説明担当は、東山キャンパスの各講座のテーマに関するものごとの歴史をはじめ見どころなどを調べ、伝えるのに興味深いポイントをまとめ、共有した。なお、講座当日は、学生スタッフ全員がそれぞれ15～20名の参加者のグループを引率することとなるため、何度も下見に出掛け情報共有したほか、コミュニケーション力を高めるための意見交換をもった。



図2. LINE上で議論を交わしながら、チームワークにより進めた。

2. 「歩いて楽しむ キャンパスミュージアム」を実施して

全5回の実施報告

各回の講座について、その実施内容、および講座参加者からの感想と学生スタッフからの感想を下記に示す。

■第1回ノーベル賞巡り 参加80名

講義ではノーベル賞および名大にゆかりあるノーベル賞受賞者の研究内容を紹介した。それをもとに、「野依記念物質科学研究館ケミストリーギャラリー」（展示室、野依良治特別教授の2001年ノーベル化学賞を記念）、「2008ノーベル賞展示室」（展示室、益川敏英博士と小林誠博士の2008年ノーベル物理学賞、下村脩博士の2008年ノーベル化学賞を記念）、「赤崎記念研究館」（展示室、赤崎勇特別教授の青色発光ダイオードの発明を記念、2014年ノーベル物理学賞）、「坂田・平田ホール」（講演会場、ノーベル賞学者を育てた坂田昌一博士と平田義正博士に敬意）、また次のノーベル賞輩出として有力視される「ITbM研究棟」（トランスフォーマティブ生命分子研究所、学際的分子研究拠点）を訪れた（図3）。ケミストリーギャラリーでは偶然にも野依良治先生にお会いすることができた。



図3. 「ノーベル賞巡り」の様子。

参加者の感想：

- ・私の子どもは名古屋大学の卒業生でしたが当時あまり来たことがなかったので参加しました。天気も良く、内容も良く、来て良かったです。
- ・普段見られないものが見え、楽しいひとときでした。
- ・野依先生にお会いできた幸運に感謝です。ありがとうございました。
- ・ノーベル賞の展示関係があったことを初めて知りました。時間を取ってまた来たいと思います。

学生スタッフの感想：

- ・今回の企画は、参加者へ学びの場を提供するだけでなく、運営する側の学生への教養育成が趣旨にあり、それに賛同したため企画に携わりました。自分の専門領域外に主体的に触れることができ、また見学施設との交流が図れたことなど、大変勉強になりました。
- ・名大の学生がキャンパス内で味わうことができる「ノーベル賞の近さ」というものを伝えることは強みだと知りました。
- ・参加者からは想定外の質問をされることも多かったです。チームでシミュレーションを行っておくとよいと思いました。

■第2回芸術巡り 参加82名

講義では名古屋大学キャンパス内で鑑賞できるアート作品を紹介し、その芸術が生まれた背景やそれが芸術や文化にどう影響をもたらしたのかを解説した。キャンパス巡りでは、博物館の「青山不老・麗日東昇（升）」（作：朱 振南氏、2016年、西洋の光彩を取り入れた水墨画）および「マグマの合掌」（作：

絹谷幸太氏，2014年，創知彫刻），国際開発校舎の「亭主の家出」（作：浪打栄光氏，70年代ペルー，ボリビア，アフガニスタン，メキシコなどを回り作品を制作，油彩画），アジア法交流館の「紙の旗」（作：柴崎幸次氏，2012年発表作品のリメイク，和紙タペストリー），多元数理科学棟の「ビッグ・イージー」（作：ロン・アラッド氏，1989年，ステンレススチール製椅子），およびITbMギャラリーの展示（デニス・ヒューイット氏，線画やイラスト）を訪問した（図4）。

参加者の感想：

- ・椅子（ビッグ・イージー／多元数理）に実際座れて良かった。
- ・学生さんも素晴らしい作品だと気が付き，大切にしていって欲しいですね。ガイドして下さった学生さんも色々お気遣いをありがとうございました。
- ・発見がたくさんありました。是非この企画を続けてほしいです。大変お世話になりました。

学生スタッフの感想：

- ・アート作品について参加者の意見を聞くことができ，自分と共感するものがあつた一方で，そうでないものもあることを知り，興味深く思いました。
- ・3年間，名大に通っていても普段意識していない名大の施設・展示等の多さに気付きました。それらについて調べることは思いのほか楽しく，理解を深めることができました。

■第3回ギャラリー巡り 参加105名

講義では名古屋大学に点在する各ギャラリーが設立された背景や趣旨を紹介し，どんなものが展示されているかを解説した。キャンパス巡りでは，「ITbMギャラリー」（「融合」とは何かを考えるきっかけとなるようなアート作品を紹介），「高木家文書資料館」（高木家文書など図書館が収蔵する貴重な古文書などの展示を公開），「野外観察園」（教育や研究のために育てられている植物を公開），「clas」（教養教育と連携し，視覚を通した複眼的な思考と総合的な知識の育成を目的に，現代美術やデザインの展覧会などを開催）を訪問し，特にclasでは展示担当者にギャラリートークを頂いた（図5）。

参加者の感想：

- ・普段訪れることのない場所を知ることができ良かったです。ギャラリーとしても活用している大学はステキです。



図4. 「芸術巡り」の様子。



図5. 「ギャラリー巡り」の様子。

- ・前回到続き、2回目の参加です。少しずつ名古屋大学のことを知り、とても楽しみになっています。
- ・名古屋にあるりっぱな大学ですので、市民で盛り上げてさらに素敵な場所になっていくことを市民の一人として期待しています。

学生スタッフの感想：

- ・事前準備の大切さが良く分かりました。たくさん準備した土台があるからこそ、落ち着いた対応ができるのだろーと思いました。
- ・このような、企画の具体的な計画から携わることはあまりないので、とても良い経験になりました。今回の経験を今後役に立てていきたいです。
- ・参加者は学生の意見を求めている面もあるようなので、所感も話しながらコミュニケーションをとることは大切だと学びました。
- ・より多くの研究科・学部所属の教員や院生・学生に協力してもらえらる体制で、より専門性も高めたツアーができると良いと思いました。

■ 第4回建築巡り 参加122名

講義では、豊田講堂から西へ帯状に伸びる緑豊かな一帯（グリーンベルト）をベースに東山キャンパスの歴史を振り返り、キャンパス創設からの建築物の継続的なマネジメントについて説明した。キャンパス巡りでは、「古川記念館(博物館)」(近代建築の特徴が随所にみられる、1964年谷口吉郎氏の設計)、「豊田講堂」(名古屋大学のシンボル、1960年楨文彦氏の設計、2011年登録有形文化財認定)、「ES総合館」(素粒子宇宙起原研究機構や環境学研究科建築学コース等が入居する総合研究棟)、「ITbM研究棟」(合成化学、触媒化学、システム生命科学、動植物科学の学際的分子研究棟)、「NIC」(ナショナルイノベーションコンプレックス、Under One Roofをメインコンセプトとした産学官の連携研究拠点)、「減災館」(名古屋大学初の免震構造の建物)を訪問し、「野依記念物質科学研究館」(化学系研究実験棟)と「野依記念学術交流館」(国際的なシンポジウムやゲストハウスからなる交流施設、2003年飯田善彦氏の設計)、「赤崎記念研究館」(青色発光ダイオードに関する特許実施料収入により建設、産学連携研究ゾーンの中心施設)、「IB電子情報館」(情報科学研究科や工学研究科が入居する総合研究棟)は外観をもとに紹介した(図6)。豊田講堂では、第5会議室、応接室、特別会議室からグリーンベルトを眺め、キャンパスマスタープランについての意見交換をした。



図6. 「建築巡り」の様子。

参加者の感想：

- ・名大の建築はいろいろな意匠があり、統一性がないようでいて、全体を見るとそれぞれの建築が自己主張しあって一つの大きな「もの」を表していると思った。オーケストラのようだ。
- ・学生ガイドさんの案内がよかった。よく準備されていると思う。先生の講義もわかりやすく、資料マップもとても良い。また機会があれば参加したいと思う。ありがとうございました。
- ・いつも楽しく、興味深く参加しています。来月最後のキャンパスミュージアムと思うとさみしいです。2019年度もぜひ企画してください。

学生スタッフの感想：

- ・本企画には、自分の中では、気軽に参加したつもりでしたが、様々な人に調べたことをうまく伝えることや、質問に受け答えすることなど、自分のためになることが多かったです。終わったあとの満足感も味わえました。このような機会はなかなか無く、こうした形で関わることができ大変嬉しく思っています。
- ・大勢の人前でツアーガイドをするような体験はなかなか無いと思うので、今回良い経験になりました。
- ・事前準備はしていましたが、当日のイベントでは、その場の参加者さんの反応を見ながら解説を工夫しました。それは大変なことでしたが、楽しくもありました。

■第5回自然探索 参加132名

講義では東山キャンパスの二次林（雑木林）の歴史を振り返りながら、ここ「貴重な緑の島」でフィールド研究が行われていることを紹介した。キャンパス巡りでは二次林沿いを辿りながら、植物は実物を目にしたり葉を触ったり、虫や野鳥などは見かけたらその説明をしたり、と探索を楽しんだ（図7）。



図7. 「自然探索」の様子。

参加者の感想：

- ・自然・環境保全を考えさせてくださった。
- ・大学の中にこのような自然の森が残っているのに驚きました。
- ・知らない植物等を手に取り見ることができて良かった。ありがとうございました。
- ・大変良い企画で参加できて本当に良かったです（最初から今日まで参加）。

学生スタッフの感想：

- ・打ち合わせに何回か参加できなかったのですが、LINEで情報のやり取りができたので、当日特に困ることなく運営できました。
- ・ガイドツアーの引率を務める上で、知識には自信がなかった分、違ったアプローチを試みましたが、参加者の皆さんには「楽しかった」との声を頂けて感無量です。
- ・事前に特に野鳥について勉強しました。おかげで、これまで意識したことがなかった野鳥が意外と街中で見られることに気付き、街歩きが楽しくなりました。
- ・参加者の方から、「この建物は何の建物？」や「名大に〇〇はありますか？」など、名大に関する質問をいくつか受けました。恥ずかしながらきちんと答えられた質問は少なく、自分の知識不足を反省しました。
- ・個人的に嬉しかったのは、「こういう好きなことを大学でやっているのは親も喜んでますよ」と言われたことです。

本企画を振り返って

本企画は、講師や各施設の協力のもと、学生らがチーム一体となり運営を運んだことで、総じて参加者から喜びの声があがり、また、回を重ねる毎に参加者数を増加させることができた。学生らは単に言

われたことをやったのではない。それぞれがチームとして企画段階から積極的に携わり、母校そして地域社会のために何ができるか、喜んでもらえるか、自ら考え、成し遂げていった。参加者からの激励を直に受けることができた学生らにとって、この経験は自信へとつながり、各々のキャリア形成へと確立できるものとなっていくだろう。

このことは、博物館にとっても実り多い結果をもたらすことになる。つまり、将来を担っていく学生の意見や興味を積極的に取り入れることで、現在そして未来に活かされる博物館へと成長していけるだろう。これにより、若者にとって博物館がより身近となり、興味とともに活動を支援していくような好循環が根付いていくことを期待したい。

3. 大学博物館と学生がともにつくる企画運営組織の構築について

今後、学生とともにつくる企画の運営組織を構築していくにあたり、今回の講座企画のほか、過去の実績が参考となった。

有志の学生らによる活動の実績

名古屋大学博物館では、2007年より有志の学生らがNUMAP（名古屋大学ミュージアム化活性化プロジェクト、ニューマップ）を設立し、名古屋大学博物館を拠点としてアウトリーチ活動（体験型イベントや展示ガイドツアー）を実施してきた。どれも、学生の視点が入り入れられた画期的なプログラムとなっており、人気を博していたと同時に、所属の学生らは自主ゼミや実地研修を重ね、自らブラッシュアップを図っていた。

しかしながら、問題は、学生主体の組織は有志のメンバーが大学を卒業すると解散もしくは活動休止の危機を迎えてしまうことがある。かくいうNUMAPも2017年3月に活動を休止することとなってしまった。

企画運営組織の構築スタートに向けて

こうした背景も考慮し、我々名古屋大学博物館は、「次世代教育・地域に活かす」をテーマに学生らの自発的な社会貢献活動をサポートする運営母体となり、学生らとともに企画運営組織の基盤を作っていくこととした。

そのメンバーを募るためにも、まずは我々の活動に興味のある学生らが情報収集しやすくなるよう、2019年7月に名古屋大学博物館のLINE専用アカウントを開設した（図8）。学生らは、主体的にこのア

図8. サイエンスイベント企画・運営スタッフ募集案内のチラシ。



図9. 「名大生による 夏休み子ども研究アドバイス会」の様子（場所：名古屋大学博物館）。



図10. 「出張！名大博物館」の様子（場所：イオン ナゴヤドーム前店）。

カウントに“友だち登録”すれば、博物館の活動運営スタッフの募集情報が得られる。これまで、名古屋大学、名古屋工業大学、南山大学の大学生・大学院生ら67名の登録があり（2019年12月現在）、イベント企画として、「名大生による 夏休み子ども研究アドバイス会（2019年8月）（図9）」、展示企画として「出張！名大博物館（2019年9月）（図10）」を実施した。またトヨタ博物館（愛知県長久手市）と協同して、現在、2020年度企画展（場所：トヨタ博物館）の準備を進めている。

今後の展開

まずは、学生を招集する一手段を構築したのみであるが、少なからず学生らが博物館の企画運営に関与したいと興味を示していることが分かった。今後、本取り組みが、学生らが社会に出る際の自己アピールの要素となれるよう、また、社会の即戦力となれるよう、本運営組織の体制を整えていきたい。特に学生らにおいては、年度毎に進級や卒業という節目があるように、体制づくりは年度毎の課題解決型プロジェクトとして実施する中で整え、その結果を出せるようにしたい。そうすれば、代替わりの際にも引き継ぎがうまくいくと想定する。

したがって、2020年度は博物館の運営資金獲得をテーマとし、何をどのように進めるかを学生とともに考えていく。その背景として、全国8割以上の博物館および博物館相当施設が「財政面で厳しい状況にある」という課題に直面しているが、名古屋大学博物館も例外ではないことを挙げ、将来を担っていく学生らはこれをどう捉えるか、学生らの意見やアイデアをもとに、課題解決を視野に入れた活動を実践により展開していく予定である。翌年度以降は、それをさらに追及する一方で、マーケティングや戦略的広報などを目的としたワーキンググループを設立し、運営組織としての実績をあげていく。本取り組みの進捗は、名古屋大学博物館報告にて発表する。

謝辞

「キャンパスミュージアム講座」にご協力いただきました、秋庭史典准教授（名古屋大学大学院情報学研究科）、恒川和久准教授（名古屋大学大学院工学研究科）、肘井直樹教授（名古屋大学大学院生命農学研究科）、栗田秀法教授（名古屋大学大学院文学研究科）、柏木晴香様（名古屋市科学館学芸員）および名古屋大学内各施設ご担当の皆様、そして学生スタッフの杉山亜矢斗さん（工学部4年生）、林 咲希さん（医学部3年生）、杵山祐貴さん（工学部2年生）、中川裕貴さん（情報文化学部3年生）、山口篤史さん（情報文化学部3年生）、吉田能英留さん（文学部3年生）、森 萌恵さん（農学部3年生）、玉置麻莉さん（文学部3年生）、中尾静香さん（工学部3年生）、鵜飼歩美さん（理学部1年生）、郷原義斗さん（工

学部3年生), 児玉祐樹さん(工学部3年生), 舟橋里帆さん(農学部3年生), 市岡幸歩さん(農学部3年生), 梶田瑠依さん(農学部3年生), 宍戸未羽さん(農学部2年生)に厚くお礼申し上げます(※括弧内記載の学年は当時).

参考文献・資料

飯野孝浩・大塚友恵・望月沙也可・北山奈津美・續木友裕・石川葉留奈・河村恵里・佐野健志・野田桃太郎・梶川瑛里・門脇誠二・西田佐知子・新美倫子・蛭薙観順(2011) NUMAP活動報告2011. *名古屋大学博物館報告*, **27**, 169-176.

大塚友恵・飯野孝浩・石川葉留奈・佐野健志・野田桃太郎・河村恵里・西井 彩・窪園侑也・杉浦真琴・蛭薙観順・新美倫子・門脇誠二(2010) NUMAP年間活動報告2010. *名古屋大学博物館報告*, **26**, 245-252.

飯野孝浩・大塚友恵・三嶋穂奈実・菊地彌知子・佐野健志・新美倫子・蛭薙観順(2009) 大学博物館を拠点とした, 学生によるアウトリーチ活動の実践報告とその展望 - NUMAP活動報告 2007-2009 -. *名古屋大学博物館報告*, **25**, 129-138.

みずほ総合研究所(2019) 持続的な博物館経営に関する調査 - 博物館が抱える課題の整理と解決に向けた取組事例 -. *平成30年度文化庁委託事業事業報告書*. 22p.

日本博物館協会(2017) *平成25年度日本の博物館総合調査報告書*. 138p.